

氏名	西平 朋子
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	沖看大博第 18 号
学位授与年月日	平成 31 年 3 月 15 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	沖縄県の離島における在日フィリピン人母親の子育て
論文審査委員	主査 教授 永島 すえみ
	副査 教授 大湾 明美
	副査 教授 川崎 道子
	副査 玉城 清子

博士論文要旨

保健看護学専攻 母子保健看護 領域	学籍番号 325002 氏名 西平 朋子
論文題目	沖縄県の離島における在日フィリピン人母親の子育て
<p>【背景】 沖縄県は全国でも有数の島嶼県であり、37の有人離島に県全体の約9%が住んでいる。離島の特徴として県平均より高齢人口と男性人口が多いこと（沖縄県企画部, 2015）から、配偶者（嫁）不足が起こっている。沖縄県離島の外国人登録者数は950人で、そのうち多良間村、伊平屋村、南大東村に多い（総務省, 2016）。国際結婚では夫日本人、妻フィリピン人の組み合わせが最も多い（法務省, 2014）。沖縄県の伊江島では「花嫁募集」が新聞に掲載されたこともあり（琉球新報, 1997）、フィリピン女性との国際結婚は離島の男性の配偶者不足を解決する手段の一つになっているとも推測される。在日外国人母親の子育て支援を考える際、子育ての困難さを理解するのみでは不十分であり、彼女らがどのように困難を乗り越え、子育てが継続できたのかを当事者の語りをもとに実証的に分析することは有効な支援の検討に欠かせないと考えられる。</p> <p>【目的】 本研究の目的は、沖縄県の離島で暮らす当該離島出身男性と結婚し、離島で子育てをしているフィリピン人母親の子育てにみられる社会的相互作用を明らかにし、フィリピン人母親の子育て支援に資することである。</p> <p>【方法】 研究デザイン: 本研究のデザインは、シンボリック相互作用論が重視する人間の解釈過程の視点を生態学モデルに組み込んだ質的研究方法である。 理論的前提: 本研究の課題である在日フィリピン人母親の子育てを明らかにするために、Bronfenbrenner (Urie Bronfenbrenner) の生態学モデルに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : M-GTA, 以後 M-GTA とする) の基盤となっているシンボリック相互作用論を導入した解釈主義的生態学モデルを理論的前提とした。 研究方法: データ収集期間は平成29年5月～平成30年3月であった。調査地は沖縄県の6離島で、研究協力者は沖縄県の離島で暮らす当該離島出身男性と結婚し、離島で子育てをしている在日フィリピン人母親13人である。質問紙調査表と日本語で実施した半構成的インタビューにより得られた逐語録をデータとし、分析にはM-GTAを用いた。なお、本研究は、沖縄県立看護大学研究倫理審査委員会の許可を得て実施した（承認番号 16025）。</p> <p>【結果】 研究協力者の概要: 研究協力者13人の平均在日年数17.6 (±4.1) 年、平均結婚年齢27.3 (±4.4) 歳、夫との年齢差12.2 (±8.2) 歳、平均子ども数2.0 (±1.4) 人であった。結婚のきっかけは職場での出会い6人、親戚などの紹介6人、仲介業者の紹介1人であった。有職者は12人、専業主婦1人、最終学歴は大卒10人、高卒3人、日常生活で使用する主な言語は、全員が日本語である。 浮上してきたカテゴリー、サブカテゴリー、概念: 逐語録の生データを分析焦点者の視点でみていき分析ワークシートを立ち上げた結果、32の概念（「」で示す）が生成され、概念間の関係から2つのサブカテゴリー、（<>で示す）と5つのカテゴリー（《》）が形成された。 子育てのプロセス: インタビューによる語りから浮上してきた沖縄県の離島で暮らすフィリピン</p>	

人母親の子育てのプロセスは、直面した《異文化での生活・子育ての困難》が「島民からのサポート」や母国と類似する「共通素材の発見」などにより《肯定的感情の醸成》へと移り、《恥ずかしくない子育て》や《島に私の居場所づくり》を实践する主体的な子育てと島民との関係性構築に努める安定化した子育てへと移行していくことであった。この子育てのプロセスは、全体を包含するカテゴリーである《母国とのつながり》で支えられていた。

異文化での生活による子育て困難の緩衝：離島の良さを見出すことによって育まれた《肯定的感情の醸成》が子育て困難感を緩和していた。島民からの「子ども誕生への祝福」は在日フィリピン人母親が島での子育てを決意する原動力になり、「潤滑油になる方言」でのコミュニケーションが近隣住民との垣根を取り除く役目を果たすとともに「島民からのサポート」を受けやすい環境を作り出していた。

子育ての支えとなる沖縄離島の家族と母国の家族：在日フィリピン人母親の子育ては「夫家族からの承認」や「夫の支え」が基盤となり、子どもの「いじめや不登校への不安」を「子どもの成長に安堵」することで払拭し、15歳になると高校進学のため島外へ出て行くため「十五の春を見据えた子育て」を意識し、「独自の子育て実践」や「子どもの成長に合わせた工夫」を重ねていた。離島での淋しさや不安は「わかってもらえるフィリピンの家族」に母国語で話すことで軽減し、母国の家族は精神的な支えとなっていた。在日フィリピン人母親は結婚後も経済的に「母国の家族を支える役割」を担っていた。自らのルーツであるフィリピンの家族に子どもが関心を示すようになったことで「フィリピンも子どもの母国になる喜び」を実感していた。そのことがフィリピン人母親の自己のアイデンティティの確認となり、沖縄の離島における生活と子育ての安定化につながっていた。

地域の一員となる子育て：在日フィリピン人母親は、家庭外にも自分の居場所づくりを展開し、地域の一員になりながら子育てを实践していた。また、このことは子どもを地域の活動と一緒に参加させることであり、活動をとおして母親のみでなく子どもも地域の一員として育つことにつながっていた。

【結論】

1. 在日フィリピン人母親の子育てとは、フィリピンで生まれ育った“これまでの私”が、沖縄の離島に住む当該離島出身の男性と結婚・出産し《異文化での生活・子育て困難》な状況にあっても《母国とのつながり》を保ちながら、離島への《肯定的感情の醸成》が育まれ進むことで主体的な活動として《島に私の居場所づくり》と《恥ずかしくない子育て》を实践し、“これからの私”へ移行し、島の生活・子育て安定化に向かっていくこと、つまり地域の一員になりながら子育てをしていくことであった。
2. 母親にとって、夫・夫家族、地域住民に受け入れられるという体験が重要であり、その体験が離島での生活・子育ての自信と決意につながる可能性が示唆された。
3. 在日フィリピン人母親の子育てには、家族・友人、近隣住民、職場、保健師など地域のサポートが重要であった。母親だけに子育てを任せない地域全体で見守り支援していく体制が継続できる方法を考えていくことが必要である
4. 在日フィリピン人母親は、子どもを育てながら母親自身も地域の一員として育っていた。地域の伝統行事や奉仕作業などへ親子で参加することは母親だけではなく子どもも地域の一員として育っていくための有効な方法であると解釈された。

博士論文審査結果の要旨

本論文は、沖縄県の母子保健看護上において未だ手つかずの重要な課題、在日外国人母親、そのなかでも沖縄県の離島に住む当該離島出身男性と結婚し、その離島で子育てをしている在日フィリピン人母親の子育てに焦点を当ててDataを収集し、分析焦点者（上記フィリピン人母親）として、Dataの意味解釈を丁寧にみてゆき理論を生成した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach: M-GTA)による実践的質的研究結果の報告である。

本研究課題が重要な理由は次の通りである。現在、沖縄県の離島における人口構成は、若年者の島外流出などがあり高齢人口と男性人口が県内平均よりも高く（沖縄県企画部, 2015）、男性の配偶者不足から「花嫁募集」が新聞に掲載され（琉球新報, 1997）ている。そのような状況において、沖縄県の在留外国人は2010年に7,651人（1997）であったのが、2015年には1.4倍の10,497人に増加している。また、沖縄県の離島における外国人登録者数は950人で、そのうちフィリピン人が191人と最も多く、居住地では多良間村、伊平屋村、南大東村などに多い（総務省, 2014）。国際結婚では夫日本人、妻フィリピン人の組み合わせが最も多い（法務省, 2014）状況が生じている。沖縄は、全国一出生率が高い一方で生涯未婚率も男女とも全国を上回り、国際結婚による家族形成が進んでおり、今後はますますこれらの状況に拍車がかかるものと予測される。従って本博士論文申請者が、国際結婚し沖縄に在留する外国人の母親、特に最も多いと報告されている在日フィリピン人母親がどのような支援を必要としているか、どのように異文化である沖縄での子育てにおける困難を乗り越えているかに焦点を当てて研究に取り組んだことは、時機を得た判断であり、今後への看護職としての支援に資するための重要な課題といえる。

本研究は、研究目的を達成するために文献を系統的に検討し、主たる1つの設問と7つの補助的問いを立て、半構成的インタビューガイドを作成し、厳密に研究倫理の手続きを踏んで実施されている。分析対象者が住む沖縄県の6つの離島（伊江島・伊平屋島・伊是名島・多良間島・久米島・南大東島）へは、フェリー、琉球エアークミューター(Ryukyuu Air Commuter: RAC)やトランスオーシャン航空(Japan Trans Ocean: JTA)などの飛行便への搭乗が必要である。1日の便数には限りがあり、沖縄本島からの距離もあり、Dataの収集には1泊2日の日程で出かけている。しかし、1日をかけて1人～2人のインタビューである。しかも今後の人生をこれらの離島で送る決意で子育てをしているフィリピン人母親、日常生活言語が日本語であるという希少な研究協力者達である。丁寧に根気強く協力者を得てData収集を心がけたことで終えることのできた研究ともいえる。

結果は、13人の研究協力者への半構成的面接で得た録音による生DataをA4用紙269枚に及ぶ逐語録におこし、M-GTAの分析手法である分析ワークシートを用いてDataに密着したヴァリエーションの意味解釈による定義を作成して32の概念（「」で示す）を生成、生成した概念間の関係を検討し2つのサブカテゴリー（〈〉で示す）と5つのカテゴリー（《》でしめす）を形成し、子育てのプロセスを浮上させている。

子育てのプロセスに関して一部提示する：分析焦点者（沖縄県の離島に住む当該離島出身男性と結婚し、その離島で子育てをしている在日フィリピン人母親）の視点からみた子育てのプロセスとは、直面した《異文化での生活・子育ての困難》が「島民からのサポート」や母国と類似する「共通素材の発見」などにより《肯定的感情の醸成》が生まれ、《恥ずかしくない子育て》や《島での居場所づくり》を实践する主体的な子育てと島民との関係性構築に努める安定化した子育てへと移行していくことであった。それはまた、子育てをしながら家庭外にも自分の居場所づくりを展開し、地域の一員になりながらの子育ての实践でもあった。

分析手法について、審査委員の一部から分析プロセスが見えにくいとの意見が聞かれた。その一因としては、今回の分析手法は申請者にとっては学習した手法であり、M-GTAの分析手法を記述すれば事足りるとの判断があったようである。従って、論文における分析手順がM-GTAの手法としての記述となり、分かりにくさにつながったようである。審査委員会では指摘を受けた後には、検討された記述が論文中において行われている。

上記以外の審査委員会における主な意見は、以下の通りであった。

長所：

1. M-GTA研究会において他大学の修士論文・博士論文提出者の分析手法を数例学習して後に

本申請者自身のDataの分析に入り、分析手法に厳密に沿いながら進められている。

2. 「子育て」に関するテーマでは、母親と子どもの二者関係に関する研究が殆どであるが、本研究では離島における地域住民との関係、学校や保健センターなどとの関係、文化による子育てへの関係に関する理論の生成が行われている。U. ブロンフェンブレンナーの発達生態学モデルを基にした枠組みによる独創性が打ち出されている。

修正を必要とする内容：

1. 枠組みにしたU.ブロンフェンブレンナーの発達生態学モデルがどのように使用されているか図示で明確に示すこと。
2. M-GTAの分析手法の説明は当然であるが、本申請者自身の分析手法（手順）を記述すること
3. 他者の先行研究と申請者自身の結果に関する比較・検討が十分になされたとはいえない箇所が考察のなかに散見される。検討すること。

以上、博士論文審査委員会における審査結果は、修正事項を確認することを条件に審査委員会一致で、当該院生を合格に相当する者と認めた。